

劇団らせん館の手紙

Berin | Nishinomiya | Amagasaki

暑中お見舞い申し上げます

みなさま、お元気でお過ごしのこと
と思います。

春の「夕陽の昇るときSTILL
FUKUSHIMA」尼崎、旧労働福祉会
館、ピッコロシアター公演、徳島、
鳴門市ドイツ館公演にお越しいた
だき、ありがとうございます。

アフタートークの際も、アンケート
にも、たくさんの素晴らしい感想を
いただき、ありがとうございます。

ほかの日にご覧になった方や、まだ
ご覧になっていない方にも、ご紹介
したいと思い、たくさんの感想の中
から数行ずつを、この「劇団らせん
館の手紙」に載せさせていただきま
した。それぞれひとかたまりの文章
やお話を短くしてしまうと、とても
残念なのですが、ご容赦ください。

また、アフタートークで声が聞こえ
にくかったり、時間が長かった、等
のご指摘もありました。これからの
公演では気をつけていきたいと思
います。今後とも、どうぞよろしくお
願ひいたします。 劇団らせん館

感想

- ・長い間公演されていることが、今回のテーマを公演される価値あるものとして、頑張っていたかと思いました。
- ・その時事性ゆえに観客にとって近づき易い演劇だと思います。これからも広い観客層に見てもらえると思います。
- ・自分が過去に観た劇とは異質なお芝居で、非常に刺激的でした。
- ・今日は福島がテーマでせりふもわかりやすかったと思います。ドイツについて、文化について知りたい。
- ・日本の現状に対して、外からの目できちっと言って下さっているととても新鮮でした。日本の中に行くと、風化が激しい。お芝居というものは生き物なのではないでしょうか。去年とはまた全然印象が違っていました。
- ・俳優ひとりひとりせりふがすばらしい。何をしているかはっきりしていて演技はすばらしい。
- ・サンチョ・パンサも、近松作品も観ました。今日のはいつもより全然わかりやすいお芝居で、娘も今日のはわかってもらえたと思います。
- ・ベートーベンの交響曲第九の合唱をドイツ語で勉強しています。指揮者バーンシュタインも世界中で戦争がなくなる、と嘆きながら死んでいった。人間は不条理の中で生きているが、だれかがどこかで何回も提起していくことが人間の英知であろう。演劇や音楽、芸術の力で、伝えていくことが大事だと思います。今日の演劇で言葉を大事にしておられると思いました。
- ・福島のことが全くわからないと思っていたが、公演を観て、短い会話から自分も想像できる何かがあり、自分の心と頭に伝わってきました。

感想

- ・今回の公演は、風化させない、共感する、という意味でいいと思います。
- ・テレビメディアより映像よりも演劇のもつ力を知りました。こんなに心を打つ、心がわななく劇は初体験です。リアルな社会問題を芸術的に昇華した演出で、オーケストラの無いオペラを観ているような感じでした。
- ・役者が演じる母と娘は、ドキュメンタリーで見るような具体的な母と娘ではなく、いろんな時代のいろんな場所の「母と娘」に思えました。心に残るセリフはたくさんありましたが、少女の「細胞さん、あそぼ」という言葉が特に印象的でした。癌という病を得た私には、希望の言葉に聞こえました。
- ・演劇の原点だと感じました。今回の舞台は放射能によって何かが起きるかもしれない、それに対して生活が記憶と層をなしているような形で、重層的な舞台として見せていただいた感じがしました。
- ・今の問題として原発の怖さを感じました。迫力があり素晴らしかった。
- ・しゃべり方も動き方も普通じゃないのに、いかにも普通の家庭に起こっているような、ドラマの様に見える。生きている生活しているというのを、こっちから見たら、こう見えるんじゃないかという、凄さを感じた
- ・物事を深く考える文化、機会が生まれればいいと思う。
- ・シリアスなテーマだが、観客へのサービスという点もおさえて、しかもよくわかるようにして、常に動いているのに無駄がない。
- ・もっとたくさんの人に見てほしいと思いました。
- ・独特の言葉の使い方、対話、俳優の熱演は福島の問題の重大さ、人々の怒り、哀しみ、祈りをしっかり届けてくれたと思います。とても充実した時間でした。

- ・飲み水のこと、洗濯物のこと、私たちの暮らしの目線から、福島の問題を切り込んで下さったこと、とても良かったと思います。
- ・すごく感動している。メディアがはっきりと扱わないテーマを前に出していただいてすごくうれしかったです。
- ・放送されないこと、忘れられたこと、チェルノブイリのことなどが今日でて良かった。
- ・外国の方が入って演じていることで、みんな世界が共有しなければならない問題だということがまざまざと見えてよかった。
- ・夕陽の昇るとき という題で、時間がすぎてとてもだめだった、悔しさがある。取り返しがつかない、そういうのを歴史が繰り返していると感じました。
- ・原発事故直後のドイツの原発事故に対する関心の高さを感じさせる作品。
ドイツ・日本の距離感が新鮮で、外国で制作されたことが普遍性をもたらしている気がした。
- ・福島の人たちが言えないことを演劇を通して、代弁？できることに演劇の力だと思いました。
- ・迫力があつた。実態を伝えていると思った。
- ・白髪の人が部屋に入ると、何やら片付けている。そこから観劇が始まっている。久しぶりの観劇で感激しました。
- ・体全体を使って表現していたり、音など口でだしたりしていて、すごいと思った。
- ・印象的な表現、公演でした。
- ・効果音、ハモニカ、打楽器、ブレス（息）良かった。舞台が日常、非日常が混ざってしまって、とまどった。
- ・東北の震災、原発問題と課題が大きいですが、わかりやすい言葉で表現されていたので理解しやすい。
- ・独創的で良かった。いろんなテーマ、課題が表現されていて考えさせられました。
- ・大変心に残るたくさんの口葉（言葉）、ことば、コトバ、、、何かを伝えるための話し方の大切さを感じました。原発の事もTVや活字で見るよりずっと心にしみました。

2014年春公演にご協力、ご後援いただきましたみなさまに、改めて、お礼を申し上げます。

2014年公演

『夕陽の昇るときSTILL FUKUSHIMA』

3月30日 尼崎/旧労働福祉会館

4月8日 尼崎/ピッコロシアター

4月13日 徳島/鳴門市ドイツ館

6月13日・14日・15日 ベルリン/ブロートファブリク(Brotfabrik)劇場

6月22日 ベルリン/ヴェルクシュタット・デア・クルチュアレン(Werkstatt der Kulturen)劇場

6月27日 ベルリン/書店カフェ・Playing with eels

公演予定

2014年8月27日-30日に スロベニアのリュブリャナ大学で開催される第18回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム (EAJS国際学会の一分科会として開催)にて、

8月29日 特別講演: 嶋田三朗(劇団らせん館)

『日常から演劇へ、演劇から日常へ—近松門左衛門の浄瑠璃、秋浜悟史作「風に咲く」の関西弁、多和田葉子作「サンチョ・パンサ」の現代日本語・ドイツ語・スペイン語の演劇を演出して—』

8月30日「夕陽の昇るとき STILL FUKUSHIMA」

演出とパーカッション: 嶋田三朗

出演: 市川ケイ、とりのかな

10月兵庫県芸術劇場 学校公演「夕陽の昇るとき STILL FUKUSHIMA」

12月3日ベルリン/プレヒトハウス文学館「STILL FUKUSHIMA Wenn die Abendsonne aufgeht」

次回は、ベルリンやリュブリャナ公演の反響などについてお知らせする予定です。



ピッコロシアター公演

ビデオからのシーン ©LasenkanTheater



鳴門市ドイツ館公演 ©Deutsches Haus Naruto



みなさま、どうぞ、お元気にお過ごしください！ 劇団らせん館一同